

特集

外 傷

Pediatric Trauma

特集を企画するにあたって

小熊 栄二

埼玉県立小児医療センター 放射線科

Eiji Oguma

Department of Radiology, Saitama Children's Medical Center

本号では「外傷」の特集を組み、4人の先生方にご寄稿をいただいた。大変お忙しい中、快く執筆をお引き受けくださった先生方に深い感謝の意を捧げたい。

頭部外傷についてご寄稿いただいた荒木尚先生は、数多くのご著作・ご講演を通じてご承知の方が多いと思われるが、日本医科大学救急医学科で研鑽を積み、国立成育医療センター脳神経外科を経て、現在足利赤十字病院救命救急センターでご活躍中であり、日本脳神経外傷学会の「重症頭部外傷治療・管理のガイドライン」作成の小児の章を担当されている。今回、「頭部外傷」全体というあまりにも広漠なテーマでお引き受けいただいた。限られた紙幅の中で、本当に数多くの損傷の形態が、脳神経外科医らしい病態生理への理解や治療経験に裏打ちされて詳細に述べられている。この一編を読むことで、小児の頭部外傷の特殊性について、相当な理解が得られる論説になっている。頭部外傷に触れる機会の少ない学会員の方にも是非一読をお奨めしたい。

腹部外傷の項をお願いした松本純一先生は、聖マリアンナ医科大学放射線医学教室で救急放射線部門の責任者を務められ、国立病院機構災害医療センターでもご活躍中であり、わが国を代表する救急放射線科医の一人である。松本先生に執筆をお願いした腹部外傷では、生命の危険を招きかねない出血の発見と対処がなによりも重要な課題となる。この課題に対する実践的な読影方法の解説をいただいている。これは数多くの外傷事例のご経験のエッセンスが結晶したものであり、これを用いることによる腹部外傷への対応力の確実な向

上が見込めるものである。

そして東京ERの看板を掲げ積極的な小児救急医療を行っている都立小児総合医療センターからは、お二人の小児放射線科医、河野達夫先生と横殿文香理先生にご寄稿をいただいた。

河野先生は、現在本学会の理事を務められ、その実力と業績は本学会員には周知のところとなっている方である。今回、ご寄稿いただいた顔面・側頭部外傷は極めて詳細な記述がなされている。この水準の読影を日常診療で行っていくのは容易なことではないが、逆にここに深く広い世界があったのだと気づかされ、学習の意欲を呼び覚まされる一編である。

四肢の骨折についてご執筆をお願いした横殿先生は、若手気鋭の小児放射線科医である。四肢の骨折は、実際の診療は診断から治療までほぼ専一に整形外科医の手で行われている。しかしながら画像診断に携わるものとしては知識の備えをしないでは許されない、正直に言えば少し気の重い分野である。ここで横殿先生には四肢の骨折に必要な知識を手堅くコンサイスにまとめていただいた。少しの時間を確保して是非知識の再確認をされることをお奨めしたい。

今回お願いをした4人の先生方は、その有能さ故に様々な方面でご活躍中であり、大変ご多忙な日々を過ごされている。依頼を差し上げるのも正直ためらわれたが、いただいた論説を拝読すると、やはり先生方をお願いしてよかったと思う。ご寄稿にここであらためて深い感謝の念を捧げたい。